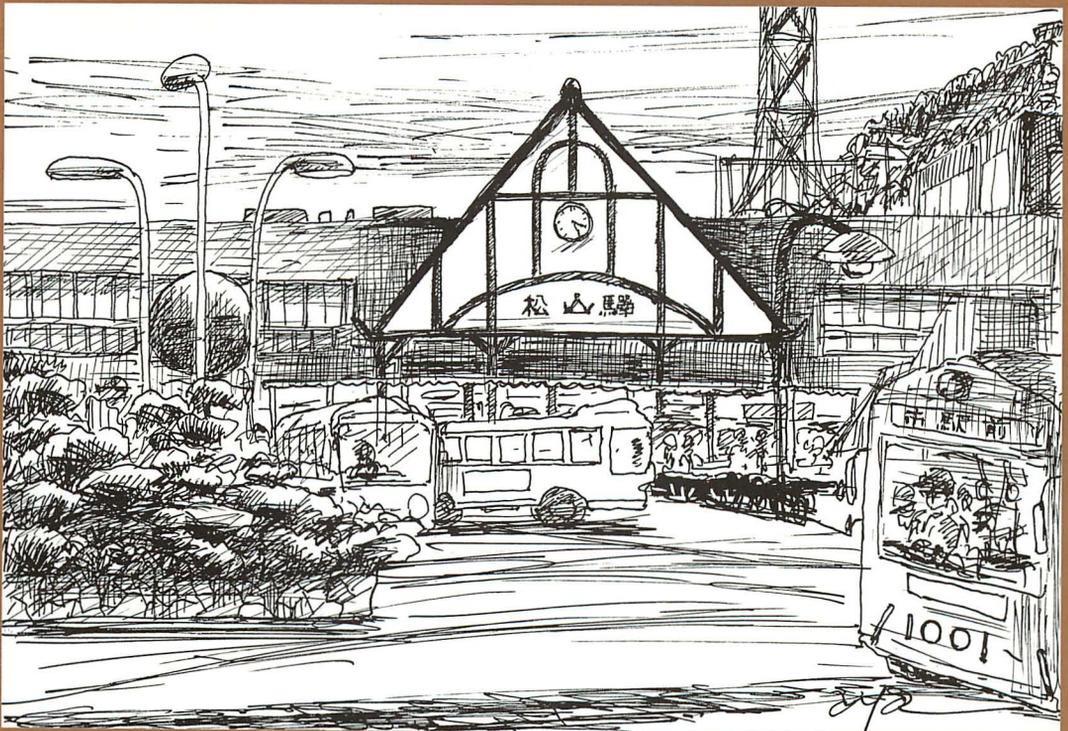


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL.67



JR松山駅

特 21世紀、キーワードは「市民」 集

—「市民」が地域をつくる—

- 新居浜市 大島
- 松山市 湯の山
- 津島町 御槇
- 八幡浜市 日土東

■アングル

南海放送アナウンサー 永江 孝子

■論談—まちづくり—

NPO政策研究所 木原 勝彬

■キラリ光るまち

広島県高宮町川根 辻駒 健二

好評連載

- ★歩キ目デス&足ラデス 岡崎 直司
- ★「ローズ館」奮闘記 山口真佐美

アングル

かあちゃんのピアス ……南海放送アナウンサー／永江 孝子 …… 1

(特集) 21世紀キーワードは『市民』－『市民』が地域をつくる－

「近くて遠い関係」を「近くて近い関係」に ……新居浜市／中島 弘一 …… 2

だれもがいつまでも安心して暮らし続けられる湯の山づくりをめざして ……松山市／天野 八重 …… 4

御槇は今 ……津島町／山口 誠揮 …… 6

山の中の“自立”地区で ……八幡浜市／萩森 健 …… 8

論談－まちづくり－

サステイナブル・コミュニティ推進の時代 ……NPO政策研究所理事長／木原 勝彬 …… 10

キラリ光るまち

まんざらじゃないわがふるさと ……広島県高宮町／辻駒 健二 …… 12

21世紀に伝えたい言葉

20世紀『舞たうん』から ……森田 浩二 …… 14

風おこしのちかい

「市民社会」をつくろう ……久万町／篠崎 克己 …… 16

研究員レポート

分権型社会における地域づくりとパートナーシップを考える ……藤田 享 …… 18

21世紀の地域社会を考える～いざ魚島村へ ……三好 誠子 …… 20

21世紀の農業は“人”に焦点をあてて ……橋岡 勝一 …… 22

まちづくり最前線

「ローズ館」奮闘記 ～ショップ編～ ……吉海町／山口真佐美 …… 24

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩き目デス&足ラテス

瀬戸町 石垣文化編 ……岡崎 直司 …… 26

Information …… 29

特集 21世紀、

キーワードは『市民』

『市民』が地域をつくる

21世紀が始まりました。右肩上がりの経済に終わりを告げ、今までの価値観、枠組みも変わります。確実に「ギアチェンジ」をする時がやってきました。

分権時代、自治体も自分の足で立てなければ消えていきます。眠っていれば地域も同じです。そこには『市民』が必要です。「自分でやるべきことを自ら考え、できることをやる」ことが『市民』たることだと思います。いかに一人一人が『市民』になれるかが、地域の明日を決めるのだと思うのです。

今回は『市民』主体で地域づくり、コミュニティづくりに取り組んでいる人々を特集してみました。

(編集子 森田)

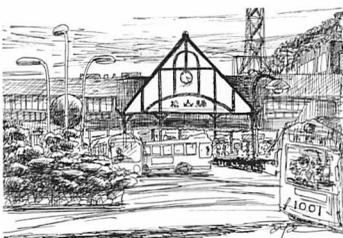
表紙の言葉

松山駅からポオーツと汽笛が響く。懐かしさに期間中耳を済ませました。一瞬の音なのに、ずーっと心に響く。

松山駅は、両親の郷里の町で、幼少期から当時は蒸気機関車に乗り、馴みの駅でした。

駅は十一月に、懐かしいルネッサンスを活かしリニューアル。その記念で久し振りに煙高く蒸気を吹き上げて走っていました。現在はSL列車と呼ばれファンに囲まれるの走行。

柳原 あや子



南海放送アナウンサー
永江 孝子



「あら!?!」私はその人の耳の小さなピアスに気が付いたのは、会が始まってすぐの時だった。内子町大瀬の静かな宿で、集落のご夫婦らを、宿のご主人が集めてくださって取材の打ち合わせ会を開いていた時、おいでくださった六十歳位の奥さんが、耳に小さなかわいいピアスをさされてい

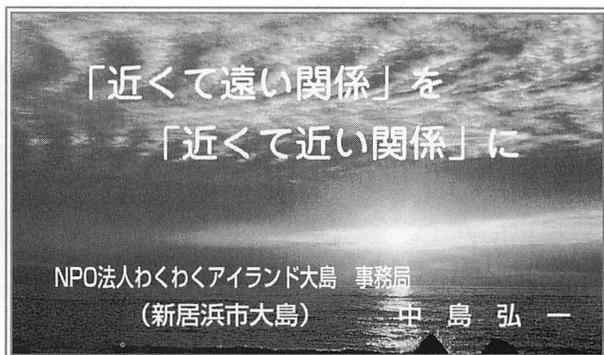
たのだ。その御年配の方のピアスにちよつとびつくりして、「おしやれですね。」と申し上げると、「このあいだ、集落の奥さん方と皆で開けました。」と聞いてまたびつくり。「みんなで・・・?」

大瀬は、かの大江健三郎さんが「谷間の小さな村」と呼ぶ故郷である。その大瀬でも最も奥にあるその集落は、農業と養豚業が主産業で、地域起しを皆で考えた時に、一つの試みとして『お母さん方のピアス』ということになったそうである。「この歳でピアス・・・?」と思たんですけど、何かええですね。」と照れながらお話くださったお母さんのピアスはきらきら輝いていた。そのピアスを見ながら、ふと思いついた。

次世代を担う若手後継者の方が、農業活性化の秘策の一つ「かあちゃんをきれいに!」作戦を教えてくださいました。《これまでこの農業は、日曜・祝日も関係なく、朝昼夜星でがんばってきたけれど、これからは少し生活を楽しむ余裕をもって、かあちゃんらに休みの日には、化粧もしおしやれもしてもらって、旅行を楽しんでもらおう!それが楽しければ楽しいほど、またかあちゃんはおしやれや旅行が出来るようがんばってくれるはず。そうして農家のかあちゃんのイメージが変れば、嫁不足も解消するはず。》というものだった。

『もぎたてテレビ』の取材で、十年に渡って愛媛の各市町村へおじゃましてきたが、元気な市町村は一步入れば分かる。空気が違う、何となく明るい。何が違うのかと目を凝らす。そうだ、かあちゃん笑顔がいいのだ! 声はりきって、楽しい響きだ。「今日は大変なんよ。朝早よから豆腐作つたらすぐ、当番じゃけん、そうめん流しに行かんといかんのよ。」とほやいてても楽しげなのだ。かあちゃんらの笑い声が町村の空気を明るく染めてゆく。

地域に根ざしたかあちゃんパワーが町村を元気にすること、とおちゃんらも気がつき始めた。皆がかあちゃん笑顔が見たいと後押しをしている。かあちゃんの耳の小さな穴は、実は地域に開けられた大きな風穴だったのだ。

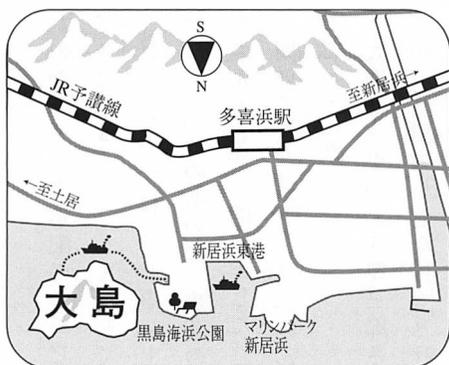


「近くて遠い関係」を
「近くて近い関係」に

NPO法人わくわくアイランド大島 事務局
(新居浜市大島) 中島 弘一

私たち「NPO法人・わくわくアイランド大島」は、新居浜市大島に住む島民有志によって自発的に作られたボランティア団体です。

「安心して老いていける島づくり」をモットーに、「島民間相互扶助」「真の地域住民の自立」「より良い住みやすい大島社会の創造」に寄与することを目的として、地域通貨



(名称・わくわく通貨) による相互助け合いボランティアと会員による公園等公共の場の清掃ボランティアなどの共同作業を行っています。

設立は平成十二年三月、出来て一年にもならないヨチヨチ歩きの子供がいます。会員数は二〇名で始まり、現在五〇名(平均年齢六七才)。幸いにも六月には愛媛県の「地域通貨活用モデル事業」実施団体に指定され、また七月には特定非営利活動法人(NPO法人)の認定も受けましたが、日々慣れない活動に試行錯誤を繰り返している真っ最中です。

島で最後まで暮らすために

私たちが住み、かつ活動の場としている新居浜市大島は、市の北東約一・五キロに浮かぶ全周約九・五キロの離島です。人口は三七七人(平成十二年七月現在)。最近では年平均十三名の方が、就学・就職・転居・死亡などの理由で島を離れていきます。戸数は一七六戸。平均年齢五九才、六五才以上の高齢者が人口に占める割合(高齢化率)は五二%という、急速に過疎と高



第4回研修会 ゲーム形式での地域通貨研修

齢化が進む島です。

大島と新居浜を繋ぐ交通手段は、一時間に一往復の市営渡海船。マイカーを持たない多くの高齢者が日用品の購入や通院のために、バスに乗り換えるか、自転車・単車で島外に出かけます。教育機関は市立大島小学校があり、今年度は全校で十名の子供たちが学んでいます。島民の健康は週に二日二時間程開く診療所が守っています。島には産業と

言えるものはなく、子どもや孫に送るための蜜柑林と僅かばかりの畑作地と年々獲れなくなる漁業があるばかりです。

村上水軍の発祥地と言われるここ大島は、かつては海運業に携わる者が多く、縁戚関係を中心とした共同体が地域と有機的に結合し、「困ったときはお互い様」という習慣が、高齢者が独りでも住める環境を今まで作ってきました。今でも「独りになっても、島から出たくない」という声を多

“わくわく通貨”サービス科目別流通調査

H12.11.02現在

番号	内容	件数	枚数
1	共同作業	41	41
2	炊き出し	9	27
3	道具物資の借り上げ	2	2
4	かぶと虫飼育	10	33
5	自動車で運搬	2	4
6	文書を配布	14	14
7	会議を支援	5	11
8	農・漁作業	1	2
9	家屋修繕	2	2
10	植木等剪定	3	3
11	水撒き	1	1
12	掃除・片づけ	2	2
13	高所・重量物	2	2
14	会員外へのボランティア	7	7
	合計	101	151



「水軍の郷」広場の清掃

く聞きます。

しかし、急速に進む過疎化高齢化によって、その良き伝統の崩壊が目の前に迫ってきました。今までは「お役所が何とかしてくれるだろう」「困ったときは周りや親戚が助けてくれるだろう」と思っていた島民も、いざ周囲を見回すと「両隣りも向かいの家もその隣りも空き家。親戚も友達も島にいない」状態に気づき、恒常的な経済の低成長によって「お役所のお金にはもう期待できない」ことが分かり出しました。

このような状態から発足したのが、私たちの「わくわく 아일랜드大島」です。島民

の多くが、自然があふれ歴史的文化にも富むこの大島で、最後まで暮らすことを願っています。そのためには「自分たちでやるしかない。自分たちで助け合わなくて誰が助けてくれる」ということに、私たちはようやく気づきました。

「わくわく 아일랜드大島」の

試行錯誤

ですから、私たちの活動の基本は「自主的な島民間の助け合い」です。他から強制されず、利害関係とも無縁な、自立した個人の地域共同体づ

くりのための「共同作業」です。

実際のところ、個人間での地域通貨の活用は、高齢者を中心とした会員間ではまだまだ馴染みにくい点が多いようです。そのためにも、会員間の関係を密にする「共同作業」の推進は重要だと思っています。

去る十月八日に行った「水軍広場」等の清掃作業では、八二才を筆頭に二九名もの会員が集まり、参加者の口からは「あゝ皆さんと汗をかいて、一緒にお喋りできて良かった」「沢山でやるとこんなにキレイになるんだねえ」との声が聞かれました。このような「共同作業」の積み重ねによって、今までの島民間の「近くて遠い関係」を「近くて近い関係」に変えていくことが、私たちの最大の課題です。

苦勞して取得した「NPO法人」の活用の仕方もまだまだ未知数ですが、とかく「なれ合い・もたれ合い」が多か

った島民間に、会（集団）の運営方法という「自立」の種を蒔いたとも言え、行政や他団体に対しても対等な立場でものを言える素地を作ったとも言えましょう。

また、ボランティアとは言っても資金的裏付けは必要です。「お金が絡むと面倒なもの」とはいえ、全てを会員間で協議しつつ、今まで手を触れずにいた「設立趣旨に基づいた収益事業」の実施も検討課題です。

* * *

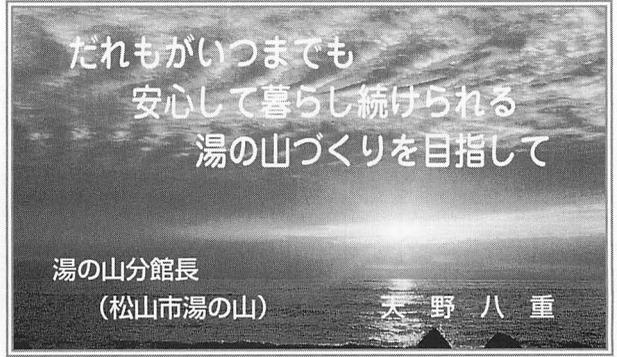
大島の島民は働き者です。四〜五十代は「洩垂れ小僧」。六十代で「若いモン」、七十代で「一人前」。八十代後半のお婆ちゃんも、今日も背負いかごを担いで峠を越え畑に向かいます。好きなだけ働いて、好きなだけ遊び、生まれ育った故郷で死ぬ。「NPO法人・わくわく 아일랜드大島」のボランティア相互助け合い・地域づくり活動は、そのための切実な活動なのです。



湯の山コミュニティホール



放課後や休日、ホール内のサロンは子供たちの社交場になります



だれもがいつまでも
安心して暮らし続けられる
湯の山づくりを目指して

湯の山分館長
(松山市湯の山)

天野 八重



湯の山は、奥道後温泉にほど近い丘の上に民間業者が開発した「グリーンヒルズ湯の山」と呼ばれている住宅団地です。

この湯の山にこの七月、地域の活動拠点となるコミュニティホールが開館しました。

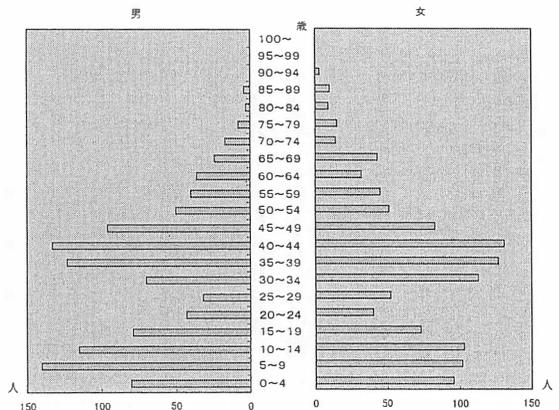
団地の二期開発に伴い集会所を建てかえたもので、延床面積約千平方メートル、ホール、小・中会議室、和室、調理室、図書室、事務室、車いすで利用できるトイレを備えています。総工費約三億二千万円は住民と開発業者が負担して建設されました。

住民から募集した有給の事務員が常駐し、朝九時から夜九時三〇分まで、土曜、日曜、休日も休みなく開館しています。運営はすべて地域で行い、費用も住民が納める管理費と施設の使用料収入で賄うことになっています。湯の山分館長はこの責任者です。

湯の山の地域づくりの歩み

湯の山の地域活動は、住宅販売業者がお客さまサービス

で開いた花火大会やもちつき大会での交流から始まりました。入居戸数が六十戸を超えた三年目に自治会が発足し、住民中心の活動になりました。子供たちが誇りを持てるふるさとづくり、住民が困ったときに力になれる組織づくりが大きな目標でした。このときから始まった夏の湯の山フェスティバルや秋のお神輿、提灯行列は今も自治会の大きな行事となっています。



湯の山住民年齢別人口構成 (1998.4.1現在)

七年目の平成四年に湯の山分館が設置され、公民館活動が始まりました。私は三年前から分館長として「だけれもがいつまでも安心して住み続けられる湯の山づくり」を目指して活動に参加をしています。

分譲二年目の昭和六十二年に、幼稚園と小学校に通う二人の子供と夫の両親との六人家族で入居をした私は、湯の山が子供が健やかに育つ町、年寄りが安心して暮らせる町になることを期待して、自分ができることは進んで協力したいと思っていました。



図書館ではいつでも自由に本が読めます

地域づくりは住民がお互いに知り合うことから始まりです。それには出会いが必要で、自治会の行事だけでは住民の交流は十分にはできなくなっていました。そこで、それまで余り活発でなかった分館活動を生かしていこうということになりました。

分館長になった私は、ボランティア活動を広げていきたくて考えました。分館事業は地域で自由に企画することができ、役員だけに任せられるのではなく、思いのある人はだれでも参加できるボランティア活動なら、さまざまな活動を進めていくことができます。それはまた多くの出会いをつくり出してくれます。

子供連れで集まった人たちが「湯の山ともしび母親クラブ」をつくりました。今少子化が大きな課題とされていますが、母親クラブの活動日には元気な声が響きわたります。

小・中学生の居場所づくりや住民の出会いの場づくりを目的に、第二、第四土曜日に集会所を開放する「湯の山倶楽部」を開きました。愛好者たちの協力で始めたテニス教室は、子供からお年寄りまでが参加する一番の交流の場になりました。この活動では男性たちが大いに活躍しています。

一人の住民の呼びかけで始まった「湯の山おはなし文庫」も八年目を迎えました。ボランティアの人たちが交替で毎週土曜日の午後、子供たちに本の貸し出しや読み聞かせをしています。この活動をさらに充実させようとコミュニティホールに図書室をつくりました。

地域の交流拠点として

コミュニティホールの開館から四カ月が過ぎました。子供たちの学習教室やサークル活動、会合など、多くの人たちに利用されています。

分館と民生児童委員が協力して開いているお年寄りの交流会も調理室で食事づくりができるようになり喜ばれています。湯の山倶楽部では卓球教室が始まりました。廊下を利用したギャラリーは、趣味の活動の発表の場として好評です。住民の交流は確実に広がっていると感じています。

だけれもがいつまでも安心して暮らし続けられる地域づくりは、住民一人一人が地域の課題に関心を持ち、知恵を出し合って解決していこうとする取り組みを通して実現されていくものだと思います。

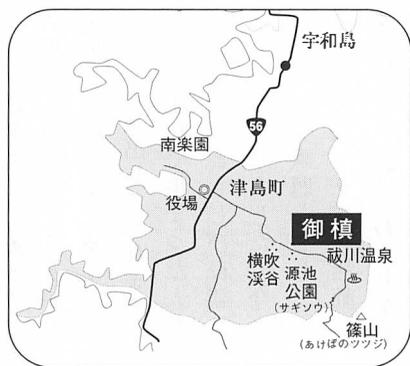
一人でも多くの人たちが出会い、地域に関心を寄せるきっかけになることを願いながら、これからも魅力ある交流の場づくりに励んでいきたいと思えます。



パッチワーク作品と作者の皆さんと
(右から2人目が筆者)



「御槇^{みまき}」、ここが私の生まれ育った地域だ。津島町の東端、高知県境に位置し、あけぼのツツジやサギソウが自生する豊かな自然が自慢だが、急速に進む過疎・高齢化の流れ。



御槇地区もその流れの真只中にある。

保育園の復活

地区内には小学校と保育園がある。保育園が平成八年度末、休園となった。その時誰もが「もう保育園が復活することはないだろう」「何れ小学校も同じ道を…」と思ったと思う。

しかし、その時、地域の若者が声をあげた。「地域にはまだ小さな子ども達がいるし、夫婦共働きなどで保育園を必要としている家庭もあるだろう。」と彼は言う。「このままやったら、保育園に行かせた

い親は、保育園のあるところに出て行ってしまおうぞ。そしてら御槇は益々さびしくなってしまうやないか。御槇が好きでここに住みたい人も仕方なしに出て行ってしまおうようになる。何とかしようや。」

そこで、地元の議員や公民館長に働きかけ、役場と掛け合ってもらった。町長や職員もその熱意と行動力に心動かされ、「十名の子ども達が集まれば、保育園を復活する。」と約束してくれた。

彼らは、地域の子どもの居る家庭を回り、協力をお願いし、機会があれば話題に上げ、保育園復活を目指し奮闘した。その甲斐あって十名の子どもが揃った。

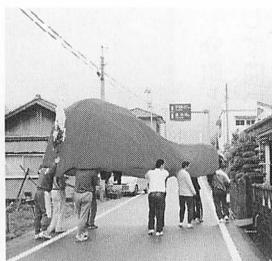
休園から一年、平成十年四月、彼らの努力が実り、「御槇保育園」は蘇えった。現在八名の園児と五名のスタッフ。

祭りも

御槇地区には「御槇神社」があり、毎年十一月三日に秋祭

りが行なわれる。昔は、五つ鹿踊り、お神輿、牛鬼、浦安の舞などが、お宮や運動場で披露され、それは賑やかなものだった。

保育園復活と同じ年、彼らは牛鬼も復活させた。一から牛鬼を作り始めた。仕事ですんだから作業場に集まった。祭りまで作業は続いた。十一月三日、若者達に担がれた牛鬼は元気良く、御槇中を所狭しと練り歩いた。若者達は汗に



復活した牛鬼



五ツ鹿踊り

まみれながらも、その顔には、彼らの満足した気持ちが覗いていた。それを迎える人々も又。

牛鬼より数年前に秋祭りに「五鹿踊り」を復活させた人達もいた。御植地区には「犬除」と「横川」の二つの地区に伝わる「五鹿踊り」があったが、ともに地区の踊りという意思が強く、それまで地区の青年が踊ってきたが青年がいなくなった為、踊りも自然消滅していったという経緯があった。そこで今回の復活に際しては、「地区」の踊りから「地域」の踊りへと住民の意識を変えていった。

はじめての花火

御植地区には郷土芸能保存会という組織があり、「盆踊り大会」、篠山神社に奉納する

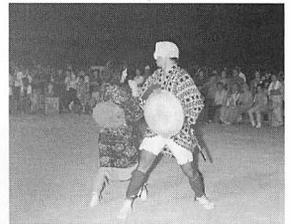
「篠相撲大会」等を行なっている。会は、地区からの代表者十二名で構成され、任期は一〜二年だ。ここ数年、世代交代をみせ、活動に勢いがつい

てきた。この会が二千年記念の「花火大会」を開催した。

会は地域からの寄付金で運営されているが、行事毎に少しずつ繰越金が貯まっていき、そのお金を地域に還元しようという話になった。その中に「打上花火」という意見があった。「夏には各地で花火が上がっている。」「二十世紀最後の年に御植に花火を上げようじゃないか。」「普段、見に行くことが出来ないお年寄りも、地元でしたら気軽に見れるんじゃないか。」「帰省した人らも盆踊りにきて花火が上がったら、よろこばい。」などなど。そうして二〇〇〇年八月十四日。盆踊り大会で轟音とともに御植の空に大輪の花火が咲き乱れた。御植始まって以来の花火であった。

青年団とおっちゃん達も

又、盆踊り大会では御植青年団の活躍も見逃せない。団員数は十名前後で少ないが、地域行事に積極的に参加して



統の太鼓踊りを踊る。団員

いる。盆踊り大会では、一般の踊りとは別に地域の伝



盆踊り大会で活躍する青年団

統の太鼓踊りを踊る。団員数が少ないため地域の高校生などに声をかけ、一緒に練習して踊る。新しい世代と交流し、地域の伝統、郷土を愛する心を伝えていく。その高校生達が次の青年団をつくっていく。世代のバトンタッチが巧く行なえている。

近隣市町村から参加のある「篠相撲大会」でも、保存会が準備し、青年団が選手として参加し、選手以外の団員や地域の女性達がバザーを行なう。地域一丸となつて。

祓川温泉を復活させた頑張り屋のおっちゃん達の話もしておこう。新しい小屋を建て温泉を引き、それを町にお願い

して立派な町営の施設にしてもらった。泉質も良いせいか、当初の計画より入浴客が多く、うれしい悲鳴を上げている状態だ。今、その人達は温泉の運営を任せられ、半ボランティアで温泉当番をしている。

* * *

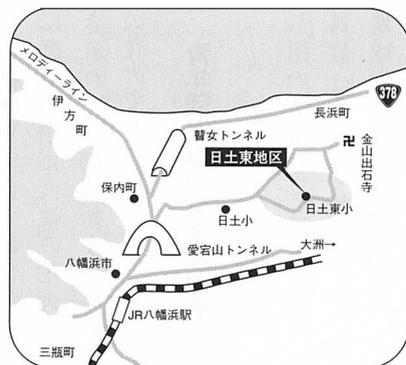
人口約五百名の小さな山間地の農村集落である御植。小さくても、否、小さいが故に一人一人が危機感を感じ、その思いが行動となって現れているのだ。

ここに来て農村が見直され、都市の生活に疲れた人々は農村に「安らぎ・癒し」を求めている。

御植の人々は、心の中に情熱を持ち、その熱い思いが今にも吹き出しそうなのだ。是非これからの「御植」に注目してほしい。きっと何かが起こるだろう。もうすでにその何かが始まっているかもしれない。「地域の時代」に向かつて。



日土町東地区は、全て山の中です。戸数一七〇戸、人口約六七〇名が七つの集落に点在。柑橘と養豚を基幹に、経済的には割と安定しており、非常に自立心の強い地域です。小学校のグラウンドがせまいので、全戸から十〜百万円のお金を集めて、市に持つていつて拡張してもらったこともありました。そして、全戸が老年寄りと一緒に穏やかに暮ら



しております。そんなごく普通（と私は思っています）の山村が、あることか全戸総出の“いづし登山マラソン大会”を運営して、全国のマラソン愛好家などの世界では知る人ぞ知る所となりました。

地区内唯一の平地である日土東小学校グラウンドをスタートして、ゴールとなる標高八二〇mの金山出石寺（通称おいづし）に向かって高低差六〇〇mの山道をかけ登るといふ地元そのまんまのコース設定が面白がられ、口コミで年々参加者が増加。総人口の二倍以上の人出に、村中それこそ



引っくり返したような騒ぎでしたが、地区のアピールという当初の目標をほぼ達成して、この年度末をもって十年間に渡る大会に終止符を打ちます。こんなことでもなければ、ヨソの方々が当地を訪れることなど無かつたらうな、と思う一方、マラソン大会は何処までいってもマラソン大会だったということも、十年掛けて理解且つ納得したようにも思います。

当地区住民の殆どが関わって十年、静かになった今、改

めて地域社会活動の点と線を考える機会にしたいと思います。そこで自立しているグループを事例に、日土東二十一世紀カンバス制作に向けてキーワードを探ります。

”イースト“

イースト・ジャパンの略。イベント及びイベントアクセサリーの企画制作を、愛好する写真とオーディオ・ビジュアルを活用して創造する趣味と実益を兼ねるグループ。主な財源はテレフォンカードの売上金。一九九〇年設立、会員数七名。

なるべく家計に負担を掛けず好きな事をした、そのための費用は自分の趣味で捻出したい。その手始めが「川のぼり」でした。地区を流れる喜木川の中を歩いて逆上る参加者を撮り発表しようというものでした。この組織が後日、いづし登山マラソンの際のモデルとなり、大会では販売用のTシャツを制作しました。



AROM-J011 葉文MI

日土東小をバックに
ノイズのCDジャケット (左から2人目が萩森さん)

グッズが本命だけど、そこは
趣味人、トドメは写真のサー
ビスで参加者ニッコリ、スタ
ッフにんまり。

”ノイズ“

ミュージック・ノイズの略。
フォークソンググループ。日
土東小PTAの父親が一九九
四年に結成。六〇一七〇年代
フォークのコピーからオリジ
ナルへ移行中。地域に生きづ
いて音楽する喜びを子供達と
共有すべく、中高生のギター
教室を開設。コーラス隊も中
高生を公募。コンセプトは地
域賛歌。活動資金は自主制作
CDの売上金。現在七期目八



授業の中で子供達と一緒に

名。

ノイズも前述のイースト同
様個人趣味がいつの間にか社
会活動に入っていた事例です。
PTAでは少数民族のおト
ーさん達が、我が子にイイト
こ見せようぜ、と始めたのが
そもそも。先のイーストが、
蒸気機関車の如く出発したの
と比べ、ノイズは”のぞみ”
みたいな見切り発車で、初演
時なんて全校児童PTA他み
んな固唾を飲み過ぎたのか、
拍手もマバラ。散々でした。

普通はこの場で即解散でし
ようが、ここからがノイズの
本領発揮です。この折の口惜
しさは、その後先生をインス
トールすることで再起動を回
ります。

バージョニアアップしたある
時、お客様が全然聴いてない
のに気が付いて、以後自分達
の歌を聴いてくれる人のため
に、定期ライブをスタート。
おトーさん達の奮闘は中高生
の関心を起こし、毎夏ギター
教室を開設、その成果発表会
も定着していきます。この子
供達との練習を繰り返すうち、
地域への思いを自分達の歌で
表現したくなりました。ノイ
ズはこの時、社会性を持った
のです。
彼らは学校と密接に繋がり、
平日でも仕事がやり繰り出来
れば協力します。そのつど授
業内容に沿った新曲を作り、
一緒に歌います。子供達は自
分の町の歌だもの、嬉しそう
に全身で歌います。

日土東小学校児童の詩によるピアノのための小品から

立派な大人

詩/菊池兼次(小6) 曲/萩森健

僕は先生が、地域のために何かしていますか、と聞かれた時にドキーンとなった。
少し考えて、僕みたいな人が増えると、日土東はどうなるんだ、と思った。
未来、ミカンが増えるか。未来、木などが増えるか。それは、僕達次第だと思った。
前にあったマラソンでは、いろいろな人達が頑張っていた。とても後遅くまで、でも、
何もせず、頑張れの一言も言えなかった。
走るのは僕、何かしてもらうのも僕。でも、片付けをまかして帰ってしまう、というの
には少し不満があった。
これからは、少しでもお手伝いをして、立派な後継者になりたいです。

日土東のいいところ

詩/岡崎由希子(6年) 曲/萩森健

日土東のいいところ それは人のやさしい気持ち
私が挨拶する前に チャンと挨拶するところ
私達が楽しめるように 楽しい行事をしてくれるところ

日土東のいいところ それは緑のやさしい自然
季節が来ると私達に きれいな花を見せてくれる
きれいなオレンジの たくさんの実を付けてくれる

私は このやさしい気持ちとやさしい自然が
この東から 消えないでほしいと思う
だって それが無くなってしまったら
さみしいところになってしまうから
日土東のいいところが ずっと続いてほしいと思う



SC像

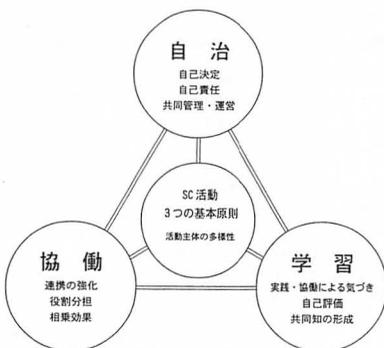
SCとは、人々が健全な環境のもとで、生き生きと働き続けられ、かつ地域の隣人と共に助け合いながら暮らしていける場であり、またその様な場を、地域の問題・課題の解決を通じて創り出し続けることの出来る住民自治型のコミュニティである。

コミュニティである。

活動内容としては、福祉サービスの提供、リサイクル事業の実施、自然エネルギーの自給、土地利用の管理、景観保全、交通問題の解決、公的施設の運営などの事業を、活動主体が協働関係を構築しながら、地域コミュニティを総合的に管理・運営しているというイメージである。

SC活動の三原則

SC活動の基本原則は、「自治」「協働」「学習」である。



相互の依存関係を強化しながら、将来世代に継承され続けていく社会である。わかりやすくいえば、二十世紀社会が分節化してきた「自然と人間」「歴史と人間」「経済と人間」「人間と人間」との「絆」の再構築をめざす社会の実現といかえることが出来る。

ところで本文は、生活の基礎領域として小学校区をベースにした、住民によるサステイナブル・コミュニティ(持続可能なコミュニティ、略称SC)づくりを通じて「持続可能な社会」の実現に寄与しようというものである。

二十一世紀は、「持続可能な社会」の実現が人類の主要なテーマになる。大量生産・大量消費・大量廃棄型の「物の豊かさを追求する社会経済システム」からの脱却である。「持続可能な社会」とは、環境保全・経済発展・生活の質の向上という三つの要素が、

つまり、活動主体に求められるのは、自治力・協働力・学習力の強化であるとともに、自治力を高めるために、協働を行い、その過程、及び結果での学習により、自治能力の質の向上につなげていくという「自治―協働―学習」サイクルを構築することである。

「自治」とは、住民や活動主体間において「協議の場づくり」「役割の分担」「ルールづくり」などの「仕組みづくり」を通じて、コミュニティとしての合意形成、あるいはコミュニティに発生する問題や課題の解決を行い、もってコミュニティの自己決定・自己責任力を高めることである。

「協働」とは、コミュニティとしての共有ビジョンや共通目標の設定に関係主体が関与するとともに、主体間の協力・連携、役割分担等を行うことにより、目標達成の効率化、及び成果の相乗効果を高

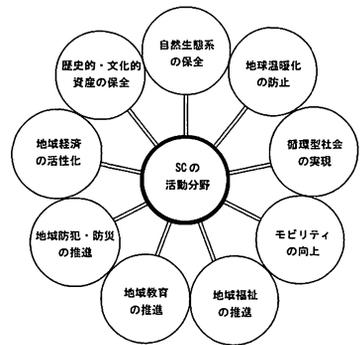
めることである。

「学習」とは、自治・協働活動の体験を通じ、活動内容の質の向上、あるいは異なった活動分野への理解を通じて活動分野の広がりを図るとともに、活動内容をチェックする行為である。

SC九つの活動分野

SCの活動分野としては、「自然生態系保全活動」「地球温暖化の防止活動」「循環型社会の実現のための活動」「モビリティの向上をめざす活動」

「歴史的・文化的資産を保全する活動」「地域経済の活性化を図る活動」「地域福祉の推進活動」「地域教育の推進活動」「地域防犯・防災の推進活動」の九つの分野が考えられる。しかし、全ての活動が当初から展開されていなければならぬということではない。活動内容の優先順位、あるいは九分野以外の活動の扱いはコ



ミュニティの決定に委ねられるべきで、将来的に最低九つの活動内容が総合的に展開される姿が理想である。

重要なことは、異なった分野で活動している活動主体が、相互に関心を持ちあい、理解しあい、協働関係を構築しあうことによって、コミュニティ全体としての相乗的な活動効果を発揮する状態をいかに早く創出させるかである。

また、活動領域の広がり、あるいは問題解決の領域については、先ずはコミュニティで、つまり小学校区エリアで

何が出来るかという考え方を起点とし、小学校区エリアで対応出来ない内容はそれを越えたエリア、次には基礎自治体領域、そして府県域…という様に順次広域化するという「補完性の原則」を基本とする。

SC対応の総合窓口機能の整備を

SCの推進には、様々な障害が立ちはだかっている。その中で、最大の課題が縦割り型の行政システムの改革であろう。先ずは、地域に対応する総合窓口機能の強化、つまり小学校区区に関わる施策、予算などの情報開示や、地域の問題・課題に対応する総合相談窓口機能の整備であろう。担当者の配置、あるいは係、課の設置などの行政改革により、住民によるSCづくりの円滑化と住民自治力の強化が図られていくものと思う。

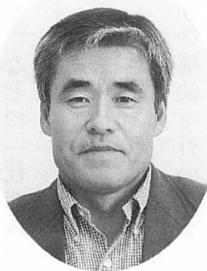
キラリ光るまち

まんざらじゃない

わがふるさと

広島県高宮町 川根振興協議会会長

辻駒 健一



私の住んでいる広島県高宮町川根は中国太郎と言われる江の川の中流域にあり、支流の長瀬川に沿って開けた扇状地を中心とした集落で平地が少なく森林面積が九割を占める。人口も一九七〇年の一一二二人から現在は六五〇人と激減し、高齢化率は五〇%近い。数字で見ると限り典型的な過疎地であるが、住民自治の

地域づくりをすすめる日本一
元気な地域だと自負している。

災い転じて…まちづくり

一九七二年の江の川流域一帯を襲った記録的な集中豪雨で川根地域は陸の孤島と化した。大きな被害を受けた。このままでは地域の存亡にかかわるといふ危機感から『せせらぎ会』を結成して、地域ぐるみで新しいまちづくりの取組みを始めた。

当初は「行政がなにもしてくれない」という不満が渦巻く議論に終始していたが、災害復旧などの具体的な活動を通して、行政施策を待つだけ



でなく、「われわれが立ち上がり、自らが行わなければ何も変らない」という住民自治の意識が芽生えた。その後一九七七年に『せせらぎ会』は全戸加入の『川根振興協議会』として再発足し、過疎に対抗する様々な地域おこしの取組みを進めているが、その中から二、三の事例を紹介したい。

エコミュージアム川根

— 地域まるごと自然博物館 —

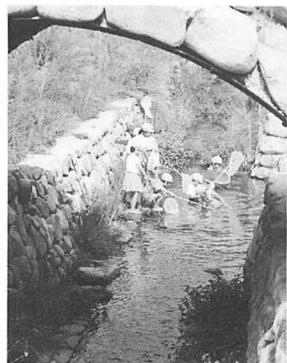
川根振興協議会の地域づくりの拠点「エコミュージアム川根」は川根中学校廃校問題を契機に生まれた。八八年に過疎化が進み統廃合問題が表

面化すると、私たちは反対運動に立ち上がり、行政を相手に激論を続ける中で得た結論は「地域づくりの拠点施設」としての活用であった。

エコミュージアム川根は住民の構想を生かした手づくりの宿泊施設で、宿泊者の世話や食事は地元の女性グループ二二名が担当すると共に運営面でも中心的役割を果たしており、地域の人々の交流の拠点としても活用されている。ちなみに私が会長を務めさせていたただくようになった九一年からは副会長は女性にお願している。地域づくりに女性の役割は大きい。



エコミュージアム川根を支える女性達



ホタル飛ぶ川根の里

エコミュージアム川根は単に施設の名称だけでなく、「川根地域まるごと自然博物館」の意味も持っている。

「昔はこの辺にもメダカが泳ぎ、ホタルもぎょうさんいた」という昔話の世界にわたらのとこをするんじやのうてこれからも孫と手をつないでホタルを見る地域にしましよ「うや」と、私は繰り返し訴えた。それは私の家が代々川漁を生業としてきたので川への愛着が人一倍強かったからであるが、自然石を敷いた水路が完成し、その後の地域の自然環境、地域資源の保護を柱とする地域づくりを展開するための布石となった。

おかげで長瀬川一帯はホタルが飛び交うようになり、二年より毎年六月の第四土曜日に地域をあげて自然祭典「ほたる祭り」を行っている。天候に恵まれない年もあるが、最近では広島などの都市部から二千人ほどの人々が訪れる大イベントとなっている。

これまでマイナスイメージにすぎなかった地域の自然環境が現在ではかけがえのない「地域の宝」としてとらえられ、無意識に暮らしてきた自分たちの生活そのものを「里山文化」としてお互いに認識できるようにになったことが何よりも嬉しい。

百年ぶりの「花田植え」

江の川本流から西側の山道を3kmほど入ったところに棚田のムラ山根がある。かつては二五〜六世帯、百人もの人が住んでいたが、現在は十一世帯十七人、三十代の男性一人を除いては全員が高齢者。普通車は入るが離合できない。

ここを舞台に、毎年地域で行う花田植えを行うことを提案したところ、「なぜ苦労して辺鄙なところで」と声があがった。引き受けの山根からも

「道もろくろくない、年寄りばかりのところ、恥をかきようなもの」と反対であったが、地元の人には「自分らの暮らしに誇りと楽しみを取り戻しましょう」と語りかけ、周辺の地域には「いちばん端っこにいる弱い立場の人々を大事にして元気を出してもらい、共に生きていくまちづくりを」と理解を求めて実現にこぎつけた。振興会の若者は「やってよかった。基盤整備した田んぼと棚田では全然感じが違う」と喜び、児玉町長さんからは「新しい地域づくりの方向を示すもの」と評価していた。 「あんだいた。」



川根「花田植え」

な小さな田んぼを大きく使っていたありがたいがとうございまして。」のお婆さんの一言には思わず涙がこぼれた。

* * *

残念ながら現在もなお、過疎は確実に進行し、一人暮らしのお年よりや高齢者世帯へのサービスは年々低下している。昨年より地域にあったJA高田郡農協の施設であったガソリンスタンドや生活店舗の存続が難しくなったので、協議会での運営を図っている。

私は農村における地域づくりは「バスに乗り遅れるな」という競争の理論ではなく、「弱い人、社会の端っこの人を

大切にすることでみんなが安定する」という思想こそが「心のふれあう豊かな地域の創造」につながると思っている。これからは川根で頑張ってきたこられた高齢者・独り暮らしの方々をたいせつにするまちづくりを進めていきたい。

21世紀に伝えたい言葉

私は、宇和のことを解説したり、批評したりするためにここにいるのではない。私は宇和に住んでいる多くの一人にすぎず、それ以上でもそれ以下でもない。人々は共に協力して仕事や生活をしたり、自然と共存する社会を創造したりしなければならない。そうすることで、人々の生活は豊かになり、文化が繁栄する。

宇和町在住 造園・彫刻家

ケース・オーウェンス氏

(59号特集「ローカルに生きる」より)

要はみんな「そこで翔べ」なんじゃないのか。そこで翔べない者が他所で翔べる訳ないよね。それは「今はやらないが、いざとなった時はやるぞ」という翔べない鳥の言い訳だ。

えひめ地域づくり研究会議運営委員

宮本 清幸氏

(53号「風おこしのちかい」より)

この町は非常に真面目すぎるくらい真面目だ。「まじめ」は高度成長期の遺物みたいなものです。ある意味の「不真面目」が必要と思う。役場の職員も住民を見ても、何かキチンとやってるみたいな工業化社会の延長をみているようだ。

大分県大山町 緒方 英雄氏

(24号—21世紀にチャレンジするまちづくり「座談会」より)

時の流れで過疎になりつつありますが、御祓を守る人々と美しい自然の御祓は消えることはありません。一度来て見てください。1時間でも2時間でも御祓の人口の増すことを楽しみにしています。

五十崎町 みそぎの色々話す会世話人

季羽 浅喜氏

(56号特集「ローカルに生きる」より)

豊の国づくり塾と言ひ、あるいはムラ起こしと言つても特別なことをやるわけではなく、「できることを精一杯、充分にやる」ことでありましょう。頭の中で考え、あるいは人から聞いた夢物語を、卓越した手練手管で実現してゆく話ではありますまい。

湯布院町 中谷健太郎氏
(8号「語録&GOROKU」より)

地域の足りないものやことは単に他所との比較で、まねをする対象ではない。地域の自然と歴史にとって無理のあるものやことをほめてもしっかりしない。地域には地域なりのスタイルという生き方がある。それらは結局、地域の人びとがどんなくらしかたを選ぶかに帰着するといつてよい。そのことは誰も教えてはくれない。

東京大学教授(当時)
大森 彌氏
(20号「巻頭言」より)

自然はいま自分にどんな役割を期待しているのか。地域の人々はいま自分に何を求めているのか。そして社会や世界は、私という人間にどんな役割をはたしてもらいたいのか。そんな自分の役割を感じとりながら、それに応えていける自在な人間。その自在な人間たちがつくりだす無事な社会が「地域」なのではないだろうか。

哲学者 内山 節氏
(60号一特別寄稿
「21世紀の地域づくり」より)

地域に学ぶことは、楽しく、また大切な宝を知る機会につながるのではないのでしょうか。それも区長さんのような役員の人だけでなく、普通に生活している「普通の人」の生活の知恵が拾い出せれば、まちづくりのアイデアはさらに広がることと確信しています。

長野県飯田市 高橋 寛治氏
(43号「論談—まちづくり」より)

20世紀が終わりました。今回21世紀幕開けの号に、もう一度かみしめたい言葉、21世紀に伝えたい言葉をこれまでの「舞たうん」から、独断でご本人の了解も得ずに抜粋してみました。

大変短い引用のため、趣旨が十分に伝わらないかもしれないことをおわびいたします。(森田)



『地域おこし』『まちづくり』といった言葉は、使い古されて手垢にまみれた感じがする。これくらい地域で使われ、実態が見えないまま続いている

言葉も少ないのではないだろうか。「活性化」というのも、そのひとつだ。何が、どうなるのが「活性化」なんだろう。「地域が元気なるということだ」と言われると、「元気づて？」と聞き返したくなる。

国の補助がつくと、そのノウハウに従って地域に何かを作る。どこへ行っても「道の駅」があり、それも二、三年でマンネリ化して寂れていく。行政の硬直化した主導といえはそれまでだが、反面、地域の熱意がないとか、協力が得られない、などの声も聞く。それも、行政サイドから。それでは、住民と行政の関係は、どうなんだろう。住民とは何？ 行政とは何？

市民と呼ばれる住民

住民というのは、一定の地域に住む人々。どんな人間かは問わない。その一方では、「市民」という言葉がよく使われるようになった。市民というと、どこかの「市」の住民

(例えば松山市民のように)と勘違いされがちだが、市民とは citizen (シテイズン=公民)を指し、「社会に対して興味や問題意識を持ち、社会のルールを尊重しつつ、個人の自由意志に基づいて発言し、自分でできる範囲で行動する意思を持つ人」を意味する。このような市民が行う社会貢献活動を市民運動、市民活動などと呼ぶ。だから、市民活動と住民活動には、社会活動と地域活動の違いがある。(この項は、愛媛県発行のパンフ「NPOって何だろう」から)

こう考えてくると、いかに市民意識を持った住民が増えてくるかが、社会や地域を変える基本的なエネルギーになる。大げさではなく、敗戦後これだけ経っても、成熟とは程遠い日本の民主主義や、遅々として進まない地方分権などの問題も、市民不在の社会ではむべなるかなの感がある。

「お上任せ」の住民意識

では、行政はどうだろう。「お上」という言葉があるように、ついこの間まで、「お上」は社会に君臨(?)していた。確かに、民主主義の世の中になったといわれるが、もともと民主主義などなかったわが国では、「お上」意識は根強く残っている。その中で、一番困るのは、住民の中に、「統治されること」に慣らされた状態が続くことだ。「お上任せ」の住民意識(自主性の薄い依存体質)が続いていることだ。

私達の社会が、行政と住民の二つのセクターからしか成り立っていないとしたら、このような悪循環の関係が成り立ってしまう。しかし、やっと、日本も変わってきた。いや、変わろうとしている。それは、行政にモノのいえる「市民」の誕生だ。

行政を「お上」とも思わず、行動や発言をすることから、しばしば行政からは煙たがら

れる。行政に不満やお願いを述べるだけの住民とは、根本的に異なる存在である。そのひとつが、ボランティア、NPOなどにみられる市民の公益活動だ。ここでいう市民団体は、行政の手で作られ、なにかの形で「育成」されている社会教育団体や民間団体でないことは、いうまでもない。

都合のよい行政・住民

ところで、「行政と住民のパートナーシップ」ということがよくいわれる。例えば、「行政と住民（民間）が手を取り合って地域の活性化に協力する」などという表現が気持ちよく、安易に使われる。だが、パートナーシップってどんな意味だろう。利用する側からみれば、単に協力、協働であったり、時には仲良しの意味だったりする。同じ公益的活動の立場に立って、お互いに自立する団体として、問題意識や緊張して相互チェックし

あう関係は皆無に近い。

行政にとって、市民ほど厄介なものはない—という意識があるのは事実。はっきり言えば、行政のやる事に従順に協力してくれる「行政にとって都合のよい住民」がほしい。

一方、地域のボスがリードする住民は、「都合のよい住民」を利口に演じて行政のサポート役をつとめ、官民のパートナーシップを強調する。行政、住民とも、めでたしめでたしなのだ。行政は住民の協力に表彰状を贈り、住民は行政の理解ある指導を褒め称えるという例のパターンだ。

「住民の市民化」という変化

結局、こんな社会になったのは、何故だろうか。高齢者や社会教育団体の会合、社会福祉協議会などで話す機会に、「これでは社会は変わらない」と言うのと、「どうして変えないといけないか」「今のままでいいじゃない」「結構、昔もいいところがあった」などという声

がある。問題意識のないところに、変化への欲求は生まれてこない。その欲求は、住民が市民になることで生まれると思う。社会に生きる存在にならないと、どうしようもない。

地域に施設を作ったり、イベントで地域活性化ができればそれで良いが、その活動が人々の意識の中に「住民の市民化」という変化を起こさせないのであれば、単なる一過性のお祭り騒ぎに終わってしまうような気がする。

感動的だった八日間

平成十二年の十月から十二月にかけて開かれた県主催の「NPOマネジメント実践講座」の企画・実施を、私たちNPO法人タイムダラー・ネットワーク・ジャパン（松山市）が受託して行った。四週間にわたって、土日の八日間の講座だったが、五〇人の定員いっぱい受講者が集まり、理論はもとより、実際にNP

Oの立ち上げ作業までの密度の濃い講座を行った。

この種の講座は、講師の講義を聞く一方的なものになりがちだが、参加者と膝を交えて具体的な問題を解決しようという双方の講座は、最終日まで参加者の熱気のあふれる八日間だった。講座を担当したのとして、NPOの理解と期待が強いことを実感させられた期間だったし、ボランティアで地域活動を行っている一般の住民が、NPO法人という具体的な形で市民活動を立ち上げていく様子は、感動的であった。

行政とNPOのかかわりには、いろいろの壁がある。ただ、それらをクリアするには、意識の改革しかないような気がする。

「今まではそうだった」とか、「急に考えを変えられない」という言い訳が横行する社会では、先は見えている。「市民社会をつくらう」という「風おこしの誓い」が欲しい。



平成12年度の中国・四国 分権型社会における地域づくりと パートナーシップを考える

主任研究員
藤田 享

平成十二年度の中国・四国ブロック地域づくりコーディネーター情報交換会は、愛媛県が開催当番。今年度の全国テーマは、「分権型社会における地域づくりとパートナーシップを考える」。さて、どこで開催したものかと思案したが、現在、地域づくり先進地と言われている現場で、実際に地域づくりに関わっている方と

ともに考えるのがベストと思
い、結局、「しずむ夕日が立ち
どまる町」をキャッチフレー
ズに夕日にこだわったまちづ
くりを進める双海町を舞台に、
その仕掛け人である若松進一
双海町地域振興課長と地元住
民の方からの話題提供をもと
に討論することにした。

双海町の地域づくりは、は
つきり言って行政主導で始ま
ったと言えようが、毎年三月
初めに開催されるシンポジウ
ムをのぞきに行ったりしてい
ると、結構意識の高い住民の
方の声が聞かれ、行政にやら
されているというよりは、自
分たちが主体的にやっている
という感じがしていたので、
今回そのあたりを確かめたい
という気持ちもあった。

* * *

十月十二日、双海町のまち
づくりの拠点施設「ふたみシ
ーサイド公園」に、中四国各
県の地域づくりコーディネー
ターと地域づくり団体協議会
事務局、そして本県の関係者

あわせて三十数名が参集。さ
っそく若松さんから、夕日に
こだわった数々の仕掛けを、
エピソードを織り交ぜつつ説
明していただいた後、会場を
もう一つの拠点「潮風ふれあ
いの館」に移した。



漁協のお母さんの売るジャコ天はすっかり双海の名物に

そこで、上灘漁協婦人部長
の富岡喜久子さんから、雑魚
の加工事業に取り組み、シー
サイド公園オープンにあわせ
てジャコ天の店を始め、年間
三千万円の売上をあげるまで
になったこと、EM菌による
排水浄化の試み、畠山重篤さ
んの「森は海の恋人」の話を
聞いてから山に木を植える運
動を展開していることなどの

話を、「ふたみ花の会」の上田
貴子さんからは、国道沿いの
花の管理、初春のイベントと
して定着した「水仙祭り」の
ことなどを自分の言葉で語っ
ていただいた。



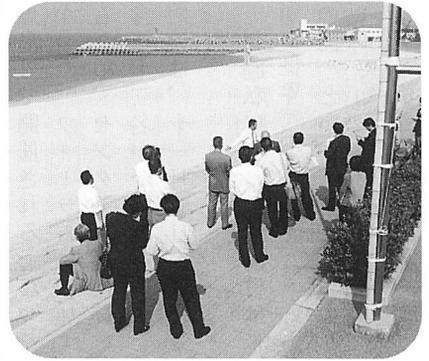
一年中花のあるところには人がやって来る

行政と住民は

パートナーシップを組めるか

こんな乱暴な質問から、テ
ーマ討議に入った。「パートナ
ー」という言葉を辞書で引く
と、「相手、相棒」、「パートナ
ーシップ」は「協力関係、共
同経営」などと出てくる。

現時点で、行政と住民とが
対等なパートナーかと言うと、



シーサイド公園で若松さんの話を聞く

そこまでいっていないところも多いだろう。住民サイドからすると、行政の担当者がコロナと変わること等による不信感。行政サイドからすると、温度差の違う団体をどう「平等」に扱うか苦慮したりと、意識の上でのミゾもある。

タイムダラー・ネットワーク・ジャパンの事務局長も務める篠崎克己さんは、住民の「市民（＝citizen）」意識のなさを指摘され、ボランティアを「育成」するといった「お上」意識の抜けきれない行政もバサッと斬られる。

たしかに、そのとおりの部

分はあるし、意識を変えていただきたい行政職員や住民の方がいることも事実であるが、最後に若松さんが言われたように、行政と住民がお互いにもっと近づかなくてはいけないと思う。単に反目するのではなく、お互いに高めていく努力。それが必要だと思う。

また、鳥取県のジゲおこし団体連絡協議会の四門隆さんが言われたように、パートナーシップのあり方も全国一律じゃなく、地域地域で違うはずで、それぞれの地域の特性の中で、パートナーシップが必然的に形成される。それが、まさに分権型社会なのだろう。

分権型社会の地域づくり

今回の分権改革の目的は、中央省庁主導の縦割りの画一行政システムを、地域社会の実情と住民のニーズに対応した住民主導の个性的で総合的な行政システムに改めることにより、安らぎと豊かさを日々実感できる真に成熟し

た社会（＝「分権型社会」）を創造していくことにあると説明されるが、それが、イコールこれからの「地域づくり」とも言えよう。

「ふるさと創生一億円事業」以後、本来地域づくりの手段であるべきハコモノの建設やイベントが、市町村主導で半ば目的化して行われてきたことも否めない。

しかし、行政にカネがなくなり、市町村合併が推進されるこれからの時代、自分たちの地域は、自分たちでなんとかするという気概がなければ、特に条件の悪い地域など生き残れない。

ところで、「市民」って何だろう。十月に大分県日田市であった『自由の森大学』で、学長の筑紫哲也さんは、①「志」をともにする者、②自分で考えて自分で行動する人、③簡単にあきらめない人とおっしゃっていた。これからすれば、意識をもって活動している人の多くが「市民」たり

うる。

「市民」（NPO）活動と地域づくり活動をこう整理された先生がいる。NPO活動は、地域を越えた課題特化型で、組織的。地域づくりの世界は地域密着型で、分野を問わず、個人の顔が見える。あえて分ける必要もないが、泥くさくても、ちゃんと地に足の着いた活動があってもいいし、ローカルな地域にNPOがあってもいい。

要は、自分のやれることをきちんと実践していくことだろう。地域に住む行政マンは、職業としてやれるわけだから、先陣を切るのもいいだろう。リーダーシップは、とれる人がとつたらいいのだと思う。

早稲田大学の宮口教授は、「21世紀型の地域づくりは、違いを格差として嘆くのではなく、新しい価値に変えていくことだ」とおっしゃる。そのために「風」の人の知恵も使えばよい。でも、最後は「土」の人がどう活かすかである。



研究員レポート 21世紀の地域社会を考える いざ 魚島村へ

研究員 三好 誠子

瀬戸内海に浮かぶ小さな島、魚島村で開催される「わたった」があった。フォーラムに参加するため、センターの研究員を含め十三名が今治港を後にしたのは、十一月十日のことでした。

勿論私にとって魚島村は未知の世界。「下水道普及率100%の島」というテレビコマース情報という中、期待とちよつ

びりの不安を抱えつつ船に乗り込んだのでした。

途中弓削港で村営汽船に乗り換え、高井神島に接岸。モダンな村営住宅が目につきます。そして少しレトロな小学校。赤い屋根と板塀が好印象でした。

地域情報化

フォーラムは老若男女取り混ぜて三十数人の参加があり、まず人数的にはOKかな？とほつと一息。

せつかく魚島村へ来たんだからと、第一部は、「地域情報化の課題とこれから」と題しての討論。まずこのフォーラムのお世話もしていただいた西岡さんから、人口三四七人の島ならではの言える魚島村での情報化の現状と今後の方針を聞きました。魚島村地域ネットワークシステムの充実ぶりと、考え方の先進性に驚かされました。

その後、「生活不便利地におけるIT活用」と題して松山大学教授墨岡先生から話していただきました。

「一九九四年当時、動いて

いたホームページは一千くらいだったが、今では百万は遙かに超え、一千万ほどになっているのではないか。これからは中身の問題になってきている。今はIT革命といわれているが、これは第二次革命といえるのではないか。最初はともかく世界中が繋がって情報交換できるようになってきたということ。これからはどんな人たちでもネットを使って自分のために役に立てる時代。」とインターネットの普及状況を説明された後、「オープンな自由な空間であるため問題は出てくるが、ネットワークの中の指導者は自然に自発的にでてくる。指導者をうまく育て、自浄作用というネットワークをきれいにする作用を持たせないと。これはネットワークの中の住民、一人一人の問題でもある。」と今後の問題点についても述べられました。また、高齢者の利用についても触れられ、「キーボードの配列は変わらないものの、機能そのものはずっとやさしくなる。高齢者にとっても使いやすくなると思わ

れるが、無理強いすべきではない。」といった話も聞かせていただきました。

その後小学校の先生から、授業で使う教材についての著作権の問題についての質問が寄せられたほか、この問題に関連して、児童・生徒のプライバシーについて、むやみに顔写真等掲載すべきではないのではないか、といった問題提起も行われました。

二十一世紀の魚島村は

第二部は、双海町の若松課長を迎えて「二十一世紀の魚島を考える」というテーマの話し合いでしたが、弁論大会の様相を呈し、熱のこもった



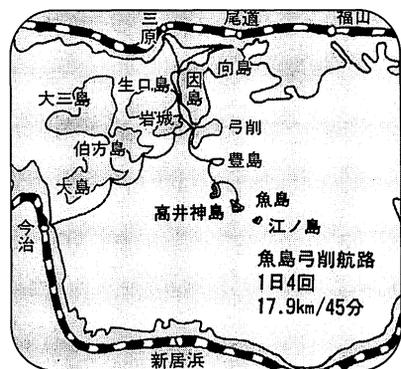
第1部で 墨岡先生の講演を聞く参加者

「わたった」とは？：魚島の古い方言で、思わぬ大金が転がりこんで、「わたった」の大騒ぎ。というように使ったそうです。

討論会となりました。

まず、佐伯真登村長より魚島村のこれまでの取り組みと将来像を話していただきました。その中で、「今まで高齢者が安心して暮らせる、若い人が希望をもって暮らせる村づくりを進めてきた。気がかりなのは合併問題。合併しても魚島が橋がかかることはなく、正直言って合併によるメリットはないのではないか。これまでも弓削町と二度合併を行い、その都度独立した経緯がある。例えば交付税が三割減っても住民が甘えを捨て、清貧の思想を持ってやることも考えられる。」と言われたのが印象的でした。

その後、参加者を交えての意見交換となりました。まず、地元参加者からは、合併問題について「かなり強引な言い方もされるだろうが、地元次第。合併し、大きくしてうまくいくという確信がなければすべきではない。とことん議論すべき」という意見が出る一方、上浦町からの参加者からは、「しまなみ海道開通によって昨年は観光客も飛躍的



に増えたが、今年は昨年の六割程度。ハード面の整備は早かったが、橋をどう活かしていくかといったソフト面の問題に、もう少し前から取り組むべきだった。」といった意見が出ていました。また学校の先生は、「何より大事なのは、魚島の良さをしっかりと受け継がせること。将来、自分達の島を心から愛することが出来るように教育していきたい」と、ふるさと教育の必要性を話されました。

それぞれに対して、「宮本常一という民俗学者が、離島振興法が出来たときに、『離島振興法が出来たことで振興するわけではない。それをどう活かすかだ。』と言われていたが、

橋も同じだ。橋をどう活かしていくのかなのだ。」瀬戸田町の和気前町長は、「感動は人から人へ七十人に伝えられる。不快感は人から人に二百十人に伝わる。」と言われている。魚島の良さをどう伝えるかだ。」二十世紀は田舎が都会に憧れた時代だが、二十一世紀は都会が田舎に憧れる時代、ひろく田舎で暮らす意義を考えていくべき。」などといったアドバイスがありました。

自分には遠い世界の出来事のように思っていた橋のこと、架かった地域、架からなかった地域それぞれに問題を抱えている現状が少しわかったような気がします。また、まだまだ先の問題と考えていたきらいのある合併問題についても、現実のものとして捉えて真剣に話し合わなければならぬ状態であることを認識させられました。

その後、フォーラムに出席いただいた方はもちろん、魚島村の若い職員の方にも参加していただき、バラエティに富んだ交流会が始まりました。卓上には村営汽船の横井

船長が腕を振るってくださいました魚島の幸が並び、まさに手づくりのもてなし料理。堪能させていただきました。あちこちで熱い議論やまちづくり談義、情報交換が夜遅くまで続きました。

もてなしの心の極意とは

そして何より魚島村で心に残ったのは翌日の帰りのこと。船着場には助役の松原さん始め前村長の佐伯増夫さん、副議長の大西さん、今回のお世話をしてくださった西岡さんなど、多くの方が見送りに駆けつけてくださったということです（佐伯村長さんは公用ですでに朝の一番で出ておられました）。前日遅くまでお付き合いくださいました上には。少々涙もろくなり始めていた私の目頭はつい滲んでしまったのでした。

迎え三步で見送り七歩、判っていてもなかなか出来ない。でもすごく大切なこと。今回のフォーラムで一番勉強になった出来事でした。魚島で出会ったたくさんの方の皆さん、本当にありがとうございました。



研究員レポート

21世紀の農業は “人”に焦点をあてて

研究員 橋岡 勝一

“人”中心の農業政策 地域課題研究サロンの

いま農山村地域では、過疎化や高齢化、少子化、花嫁不足等の人口に関する問題が深刻になっていきます。

そんな中、十一月、当センター主催で、これからの農山村の行く末を本気で考えようと、地域課題研究サロン『二十一世紀の農山村を考える』

を開催しました。

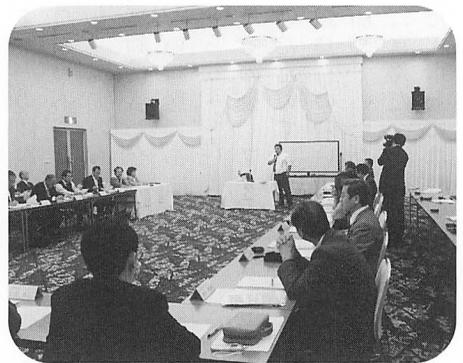
まず熊本大学の徳野貞雄教授から、『農業・農村政策のパラダイム転換』と題した基調講演があり、日本の農業・農村政策について、「これまでは農作物生産の技術向上や圃場の整備、規模の拡大、機械化によるコスト低減など、生産のことしか考えてこなかった。これからは担い手、農村に住む人、農産物を買う消費者に目を向けなければならぬ」との話がありました。

確かに、これまでは農業土木、生産技術についての専門家はいても、農業に関わる“人”についての専門家は欠けていたのではないかと思います。

この後の、無茶々園の片山元治事務局長、みかめ女性塾の井上次恵塾長、ちろりん農園の西川則孝さんを交えたサロントーキングでも、“人”について議論されました。

地元の後継者がいないことについて、

「親が価値観を変えないとダメだ」「農業をやりたい人はいない。東京や大阪に情報を出せば来る人はいらぬと思う。ただ入った後のケアが大事」



地域課題研究サロン「21世紀の農山村を考える」

「よそから来た人に最初は給料を払って働いてもらってある時期になったら農地を譲るといふのを考えてやっていける人もいる」などの意見がありました。担い手にイターン者を受け入れるのも一つの方法で、地域の受け入れ体制が重要になってくると思います。

徳野教授は「子供が田舎に帰ってこないなら、一年間くらい孫を帰すことを考えられないか。じいさんとばあさんと生活すれば、田舎の良さが分かり、将来住んでくれるかも」と提案されました。

また、後継者がいても嫁がこないという地域もあります。農山村の嫁不足も深刻な問題

です。

ところで、いまの農業を支えているのは女性です。「農業は男だけではできん。夫婦共同作業だが、農家の嫁は何もかもせないけん。男女共同参画社会の研修に六十〜七十代の人に出てもらって勉強してほしい」と、農業の担い手でもある女性への理解を求める意見が出ました。女性が地域活動へ積極参加することへの家族の支援も、農山村地域の活性化につながると思います。

消費者について、片山さんは「わしらは、消費者、環境を考えて、ISO14001の取得を目指している。五十人にパソコンを買わして、右手にマウス、左手に盃でやっている。生産情報を公開して、消費者に安心・安全を訴える。農業もITの時代だ」と言われていました。消費者の健康、環境への関心が高まる中、農業も変わらなければなりません。

農村定住を考える農協

鳥取県・JAとうほく

十月に双海町であった中国の地域づくりコーディネー



JAとうはく「カウベルホール」

ターが集まる会議で、農協が先頭に立って地域づくりに取り組んでいる鳥取県・JAとうはくの四門隆ふるさと二十一推進室長にお会いしました。その取り組みに興味を持ち、お伺いすることにしました。

JAとうはくは鳥取県の中央部にある農協で、定住化を進めるため、米生産に適さない地域にプロイラー、豚、牛の生産団地の整備をしたり、二十世紀梨園の造成を行い、できた農畜産物を消費者に直接販売して、農家の生産と経営の安定を図っています。また、チキンセンターやミートセンター等の加工施設も整備し、地域の雇用の場をつくっています。

JAとうはくの一の特徴は、コンサート会場にも使える『カウベルホール』を建設したこと。館長でもある四門室長の案内で、同ホールを見学させていただきました。

四門室長は「学習・交流・文化をコンセプトにつくったホールの運営で農業を支援したい。農家は朝から晩まで働くのではなく、自分の時間をつくって習い事をしたり、加工室などが女性たちの井戸端会議の場になってもいいし、イベントをやってもいい。地域・集落のつながりの復活と、農家は農業だけでないというライフスタイルを確立したい」と話され、同農協のゆとりある農村生活へ目を向けた取り組みに驚きました。

このほかにも、老人ホームや保育園をつくって福祉・教育にも力を入れ、また住宅団地もつくり定住化を進めています。

”人”に安全な農産物を

宮崎県綾町

今年度の西瀬戸まちづくり・むらおこし交流推進事業で、宮崎県綾町へ伺いました。

綾町は、”照葉樹林都市”として知られ、豊かな自然が多く残っています。その自然を守り育てるために有機農業に取り組み、”自然生態系農業の町”でもあります。

綾町の有機農業の始まりは、昭和四十八年、同町で盛んに行われている自治公民館活動の中で『一坪菜園運動』でした。農薬、化学肥料は使わず、自分とこで食べるものを自分で作ろうとやってみると結構とれて、余った野菜が出てきました。それを青空市に出したところ、新鮮で安全な農産物という評判が次第に口コミで広がり、町外から買いに来る人が増えてきました。

その後、町、農協が、堆肥工場をつくったり、産直を始めて、有機農業を進めていきました。昭和六十三年に全国初の「自然生態系農業の推進に関する条例」を制定し、有機農産物に対する独自の基準づくりと認証で、消費者から安心と信頼を得ています。

また平成元年には、町民がつくったものは何でも売れる『手づくりほんものセンター』ができました。ここでも有機

野菜は人気で、年間三億七千万円もの売上げがあります。

自然環境と、つくる”人”、消費する”人”を考えた農業をやったことで、綾町にはインターン者も数多く入ってきています。

* * *

JAとうはくも綾町も”人”、生活を考えた農業を実践しています。住んでいたいと思う農村づくりに取り組んでいきます。まずはそれぞれの地域でビジョンを持って住んでいたい農村をつくり、それが次第に住んでみたい、帰りたい農村にもなると思います。

言うのは簡単ですが、二十一世紀の農業は”人”です。



西瀬戸まちづくり・むらおこし交流推進事業で綾町の有機農業畑を見学

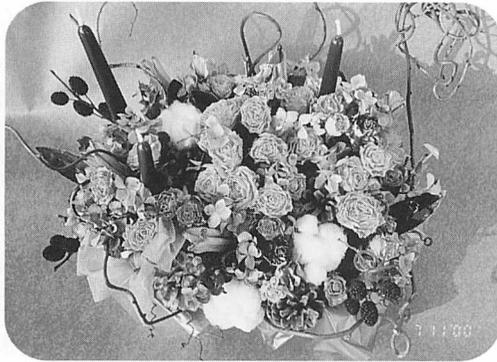
新年明けましておめでとう
ございます。昨年はローズ館
にとって厳しくもあり、実り
多くもあり、いっぱい勉強で
きた一年でありました。さて
今回は、前回の「ローズ館奮
闘記」レストラン編」の続
編で「ショップ編」です。

**私達の仕事は施設を
維持すること**

第三セクターとして生き残
るためには、商業主義に走っ
ていると言われようと、ひる
むことなく突き進むしかない
と私達は思っています。第三
セクターといえども倒れると
きは倒れます。ローズ館は加
工室を擁する施設ですから、
まちづくりの面からも絶対倒
れるわけには行きません。

もともとローズ館は、多く
の第三セクター方式の店舗が
そうであるように、郷土産品
販売所としてオープンしまし
た。瀬戸内で捕れる新鮮な魚
と柑橘が特産品の吉海では、
長期保存が可能で販売しやすい

加工品は、昔からある「のり」
（おいしいですよ）と、新しく
始めた「ひじき」（これも、
おいしいですよ）くらいしか
有りません。この二つにして
も冬が旬なうえに全体量が少
なく、春には完売してしまい



山口真佐美

ます。新鮮な野菜や
柑橘はこの辺りなら
どこでも安く「農家
直売市場的」に販売
していますからハー
ドもソフトもかち合
ってしまい、思うよ
うには売れてくれま
せん。

本当に「声を大に
して」言いたいの

ですが「採れ立ての地物の野菜
や果物がいっぱい」だけでは
もう集客できないのです。「美
味しい物」にしても「楽しい
場所」にしても他とは違う何
かが無ければ、これからはも
っともっと厳しくなるでしょ
う。とはいえ、新しく「これ
だ！」と言う郷土産品などが
生まれ、大きく育つまでには
時間がかかります。その間は
とにかく施設を維持するだけ
の売上を上げること、リピー
ターとなるお客様をいっぱい
作ることが私達に課せられた
仕事と思っています。



**目指せ！おしゃれで
田舎くさいバラの土産店**

しまなみ海道開通前は無名
に近かった吉海町バラ公園は
開通後ちょっと有名になり
開通一周年に当たる昨年のゴ
ールデンウィークなどは、ま
だ開花していなかったのに大
勢のお客様が押し寄せて、ち
よっとしたパニックになっ
てしまいました。「せつかく来た
のにバラが咲いてない！」と
憤慨するお客様の怒りも治ま
るようなショップにもしなけ
ればなりません。

隣はバラ公園、施設の名前

は「ローズ館」、お客様の求め
ている物も「バラ」、となれば
モチーフは当然「バラ」。ネオ
ン輝く東京や大阪までスタッ
フと出かけて捜し求めたバラ
グッズは、面白いもの素敵な
ものが沢山有りヒット商品も
生まれましたが、数々のすば
らしい商品を抜いて大ヒット
したのは何と、「ローズ館スタ
ッフが作ったバラのドライフ
ラワリース」でした。これ
は前年の秋のバラ祭りで行っ
た「山の木の実のリース作り」
の反応を踏まえて着手したも
のですが、ホームワークینگ
レディス（いわゆる内職さん
です）部隊を発足させ「内職
賃金を発生させつつも中間業
者が入らない為、価格をギリ
ギリまで下げる事が出来る」
一石二鳥のすばらしい商品で
した。決して趣味の延長上で
は作らないと言う鉄則の元で
作られたこの商品は、安価に
加えてどこか温かみのある、
言い換えればちょっと田舎の
香りがするところがポイント

いい気になって、リースを
作りつづけた私達を待ってい
たものは、梅雨に入って恐ろ
しい勢いで始まったドライ物
の劣化でした。乾燥剤の封入
が遅れポップもリースもどん
どん褪色して行きました。バ



リースが満開の店内

**油断は禁物！
本物は劣化する！**

夏は、劣化の恐れが無いも
のを中心に商品を入れ替え、
秋がやって来て、秋バージョ
ンのリースは再び大人気とな
りましたが、その影で度重な
る商品の入れ替えと直輸入物
の一括購入で大量の在庫が生
まれてしまいました。面白い
お店の裏では、もっと緻密に
在庫管理をしなくてはいいけな



×切に遅れて、
本当にごめんなさい。
これで連載（勝手に決めて
いるのですが）打ち切り
なんて言わないで下さいね。
この後、加工品編と企画観
光プロジェクト編が待っ
てますです。

かったのです。売上を上げて
も利益が上がりなければ何に
もなりません。私達はまだま
だダメでした。でもめげませ
ん。元々素人ですから怖いも
の無しです。学習したことは
必ず次に生かせるじゃないで
すか。

（つづく）

「ローズ館」奮闘記

～ショップ編～



（有）伊予大島
ローズ館
館長

で、都会の雑貨屋さんと同じ
になってしまったてはやつぱり
面白くないのでしょうか。

学習したことは

次に生かそう!!



大久集落の石垣

“MY TOWN,”らおっちゃんく

歩キ目デス & 足ラテス



第14弾

岡崎 直司

佐田岬半島の中ほどに、瀬戸町という人口三千人位の町がある。この地域もちよいと面白い。

まずは、瀬戸内側に面し、役場もある三机から。思えば妙な地名だが、どうも机を三つ並べて考えた訳ではなさそうだ。その昔、宇和島藩の港だったこの地へは、参勤交代の途中、お殿様がよく立ち寄られたとの事。つまりは御着江（みつくえ）ということであるらしい。

さて、その港の中央には、砂洲が発達して出来た須賀ノ森という、八幡神社のある鎮守の杜がある（写真①）。三机湾自体は、かつての真珠湾攻撃秘密訓練基地だったりするのだが、紙面の都合で今回は割愛。そのまゝで、海の中に誕生した不思議な杜には、ウ

バメガシやらビヤクシンやら古木がこんもりと繁り、それだけで何やら聖域めいたものを醸している。散策にはもってこいだ。神様の粋な計らいと言うべきか。

そして発見したのは、古色蒼然としたこの土堀（写真②）。いつ頃のものは判らない。青石と赤土、瓦と植物で構成された、このラフさ加減がとてもイイ。一部白っぽい花崗岩が使われているのはご愛敬。青石は、正確には緑泥片岩。東は吉野川から西は佐田岬まで、四国を真一文字に貫いている三波川変成帯の主要岩石である。この半島自体が青石製のサーベルだと思えば分かりやすい。そんなだから、このエリアの石垣文化は半端じゃない。それをいくつか紹介したいワケ。

写真③は、同じ杜の中のある小さなお社。地元ではバベと呼ぶウバメガシと青い石積みで囲まれ、しかも木で出来た鳥居越しに見れば、神様

文化編

○松山



長養寺石垣



小 祠



青石土堀



須賀ノ森

でなくとも宿りたくなる風情がある。

写真④。三机では非とも見えて欲しいのがここ長養寺の石垣。家並みを見渡せる位置にあるから、どこからでもすぐ分かる。中ほどの山門に向けて登る石段の両脇に、合わせて約一〇〇mにもなろうか、スカート状に裾が広がり実に壮観。築造年が文化十三年、仁明和尚の代と刻まれているので、今から一八〇余年前の江戸期、手練れの石工が居たものとみえる。何年がかりか、経験と勘だけでこのフアジーな乱れ積みが築けるのだから、人間の能力は計り知れない。

瀬戸町 石垣



国の登録文化財にイチ押しとしよう。

写真⑤。宇和海側では、塩成にある要橋がユニーク。既に町文化財に指定されているが、この橋を知る人は余程のツー。畳くらいの青石を組み、これでも県下では希なアーチ石橋ナノダ。しかも、こうしたタイプを迫り持ち式アーチと呼び、全国的にもその数は非常に少ない。青石という石の性質上、九州の如き円弧状

の石橋とはならないのがミソである。土木遺産が脚光を浴びる昨今、もつとポピュラーに知られている。

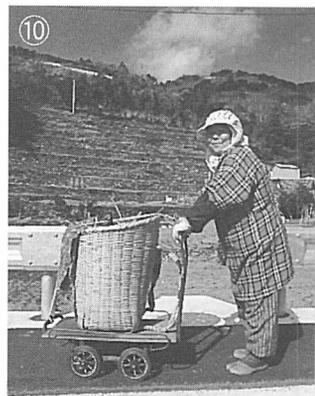
写真⑥。塩成の振の浜には大井戸の石組みが見られる。

ふたに使用された青石と車を比較して欲しい。トンでもなく大きい。

大久の浜にも行ってみた。

写真⑦。当然砂浜は青石の粒で出来ている。沖縄の竹富島が星砂の島なら、瀬戸は青砂海岸。

写真⑧。片や集落を歩けば、こんな石垣にも出くわす。畑の石積みには勿体無いくらいの見事な曲線美。



地元のおばさん

写真⑨。段々畑の石垣を忘

れてはいけない。川之浜に行くと、旧197号沿いに今もこうした光景が広がっている。かつては、それこそ天まで耕された段畑が至る所にあり、南予一円の海岸線をおおっていた。古写真でしか見られないほど時代の移ろいが激しい。丁度急な石段を下りて来た地元のおばさんとはばらく談笑。一枚写真を懇願すると、

ちよつとおスマシで
応じてくれた。瀬戸
の温かさが伝わって
来た。



要橋



塩成振の浜の大井戸



大久の浜



川之浜の段々畑

舞たうん



編集雑記

役場建設課から研究員としてまちセンで学び始めて早九ヶ月。県内外の先進地を訪ね、いろんなタイプの「まちづくり」の仕掛け人・研究者と出会、すべてが学びの日々です。それは「まちづくり」の学びというより、一人の人間としての学びです。そこで、これまでに痛烈に感じたことを、自分自身の応援と想って二つ紹介します。

まず、今だからこそ「地域づくり」だということ。小学校区とか自治会とかの狭い範囲の「地域づくり」です。今、「市町村合併」という言葉が「地域」を取り囲み流行のようにはぼ毎日、新聞紙上をにぎわしています。確かに「合併」は、今議論しなければなりません。市町村は、もっと積極的に住民に向かって、このことについて投げかけ、問うべきだと思います。そして、職員自身が自分の言葉で語るべきでしょう。もう、職員は「小役人」ではいられません。職員自身の元氣（体力と気力）と知力が試される時が来ました。頑張ろう、市町村職員（自分も含めて）。そうすれば、自ずと「地域づくり」にたどり着くはずですよ。自分の足の地域づくりには、いまこそ「地域づくり」を自分のこととして考えるべきです。今まで何も始まってない地域は、今からではもう遅いのもかもしれません。しかし今からでも始めないと、今度はホントに地域が無くなってしま、そうな気がするのは私だけではないはずですよ。

二つめに自分たちの「世代」についてです。私は昭和四〇年生まれ。高度成長の真っ只中で幼少期を過ごし、学生時代はバブルでした。共通一次と呼ばれた受験の後、就職活動は売り手市場。内定を早々にもらい、解禁日には会社から接待まで受けるという始末。これまで、社会や地域の



西村寛子のひびくこと

シワチアシスカー



明けまして
おめでと〜ございませす

新年号という事でこんな姿
でご挨拶です！

とうとう来ましたねえ、21世紀。この百年でまた随分世の中変わるんだろうなあ。絶えず変りつづける事って難しいんだらうけど、同時に変りつづける世の中で伝統だとかいいものを残していく事もまた難しいと思いませんか？

21世紀、私はどんな風に完成？？成長していくんだらうなあ。

とりあえず、その結果がでるのは後60年も先の事だし、天国行こっかなって思った時に「あたしの人生最高だったわっ!!」って思えたらいいかなら、今は目の前の出来事に右往左往しながら成長していくだけ？？という事でそれを目標に21世紀もまた私らしくぼちぼちいきます！センターの皆さん、今世紀も温かく見守ってくださいね。



(森田)

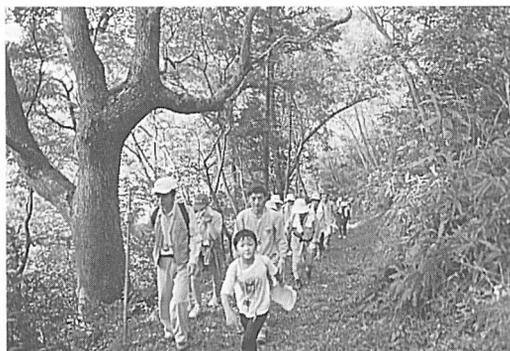
あ、もう一言だけ。読者の皆様！センターの方にも気軽に
にお立ち寄りくださいなっ!!

21世紀に伝えたいもの。四国で一つあげるとすれば、1200年の歴史を有する四国霊場88か所を巡る遍路道、それにまつわる癒しの文化ではないでしょうか。

津島町まちづくりフォーラム

— 柏越えから癒しの里が見えますか 松尾峠から相生の里が見えますか —

- と き 平成13年2月11日(日) 13:00~17:00
- ところ 津島町中央公民館
- 問い合わせ 津島町役場まちづくり推進課 (☎0895-32-2721)



トレッキング・ザ・空海

— 昔ながらの柏坂へんろ道を歩いてみませんか —

- と き 平成13年3月18日(日) (予定)
 - ところ 内海村DE・あ・い・21 9:30集合 柏坂~津島町畑地
 - 問い合わせ DE・あ・い・21 (☎0895-85-1021)
- 参加費無料・弁当は各自持参・各所にお接待あり。

BOOK INFORMATION

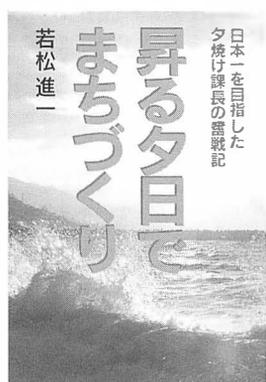
20世紀最後の日没にあわせて、あの若松さんが、こんな本を自費出版しました。



これを読まずして
町づくりは
語れない!!

どこでも見られる夕日を日本一にしたその思い、アイチア、実践の教々を……夕日の町づくりは日本一海に近い下灘駅での夕焼けコンサートから始まった。……そして、今や全国に知られる町づくりの名物男。何ともいえない味のある風貌と、憎めないキャラクターで町を元気にさせ、過疎と地盤沈下に悩む漁村を、年間55万人もがやってくる観光の町にした、そのバワ一の秘密とは？

- 主な内容
- 夕日との出会い
- 夕焼けコンサート
- まちづくりの始動
- 夕日の町のCI戦略
- 道の駅のイベント
- 夕日の物語
- 沈まない夕日
- 夢は夕日ビールを造ること
- 夕日に魅せられた男へのメッセージ



●昇る夕日でまちづくり
若松 進一 著
四六版 264ページ
1,429円 (税別)
発売：アトラス出版
(☎089-932-8131)

※書店にない場合は、若松さん宅にも在庫があるそうです。

新世紀 あけまして おめでとうございます

えひめ地域づくり研究会議フォーラム2001

テーマ「行政と住民のパートナーシップ」—本音で語る過去と今—

21世紀を迎え、政治、経済、社会の急速な変化はとどまることをしらず、行政と住民の関係も、過去の「縦の関係」から「横の関係」へと大きな質的な変化が起っています。公益的なサービスは行政だけの仕事ではなく、住民が自らの意思と行動で公益的なサービスを行う市民活動やボランティア活動が生まれています。

一方で、地域での住民活動の歴史の中には、自治会、公民館、青年団、婦人会といった既存の組織が続いており、新しく生まれた市民活動団体との摩擦や、それぞれに対する行政の対応の違いなど、問題も見られます。

地域づくり、まちおこしなどの地域の活性化には、住民の参加が欠かせません。それでは、どんな形で、どんな風な住民参加が求められるのでしょうか。行政と住民のパートナーシップは、どうあるべきでしょうか。そんな問題を、フォーラムの中で、率直に話し合い、それを通じて、今後の相互理解や協調関係を模索したいと思います。

◆とき 平成13年1月20日(土)

◆ところ えひめ共済会館 (松山市三番町5-13-1)

◆プログラム 13:00～ 受付
13:30～ 開会
13:40～ 話題提供

スピーカー 井原まゆみ (徳島県阿波町「環境フォーラム」事務局)

15:00～ 「バトル——ここだけの話」

■菊地 修 (えひめNPO研究会)

■村上 寛仁 (生名村「交民館」)

井原まゆみさんも参加して

コーディネーター 篠崎 克己 (研究会議運営委員)

17:45 閉会

18:00～ 交流会

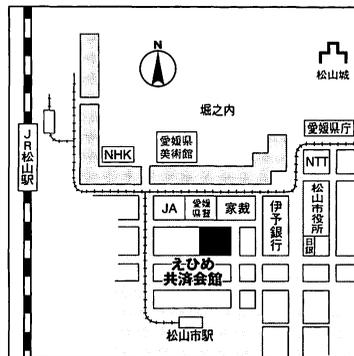
◆参加費 フォーラム 1,000円 交流会 5,000円

◆申込み えひめ地域づくり研究会議事務局 (えひめ地域政策研究センター内)

TEL089-932-7750 FAX089-932-7760

E-mail: machicen@mail.netwave.or.jp

平成13年1月12日(金)までに



印刷／三創印刷株式会社

(財)えひめ地域政策
研究センター

発行／二〇〇一年一月一日

TEL089 (932) 7750
FAX089 (932) 7760

(財)えひめ地域政策研究センター
まちづくり活動部門

〒790-0003
松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階

内容についてのご意見やま
ちづくり活動のトピックなどあり
ましたら、お気軽に『舞たうん』
編集係までお寄せください。

(森田)

♪新世紀、新世紀のいよいよ
21世紀がスタートしました。子
どもの頃、アニメで見て「どん
な未来なんだろう」と思い巡ら
せていた。21世紀です。高齢化・
少子化・情報化・環境そして合
併問題。どの地域でも「鉄腕ア
トム」の登場が待たれます。お
茶ノ水博士になるのはだれでも
ありません。あなた自身です。

☆<http://www.netwave.or.jp/~machicen/>

☆E-mail:machicen@mail.netwave.or.jp

本誌は、(財)愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。